

国

(問題)

語

2015年度

<2015 H27090111>

注意事項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～11ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意
- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) マーク欄にははっきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	● 良	○ 悪	○ 悪
マークを消す時	○ 良	○ 悪	○ 悪

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例)
3 8 2 5 番
↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

(一) 次の甲・乙を読んで、あとの問いに答えよ。

甲

〔次の文章は、明応六年へ一四九七に成立した歌学書「釣舟」から抄出したものである。なお、途中省略した箇所がある。〕

ある童形、敷島の道に深く心を寄せて、歌詠むさま我に教へよと度々ありしかども、いかなる事を注し参らすべきとも覚えはべらず。昔より先達の書き置かれし物いと多かりければ、また何事をか申しはべるべき。ことさらに近きほどは、洛陽の月のもとを別れて、辺鄙の塵に埋もれしかば、かたがた片端聴聞せしことも忘れ果てぬるうへ、なかなか僻覚えなることはいかがと思ひながら、花の匂ひ深きころろざしにめで、柳の糸のすぢ無き事を書き集めて、この一冊となしはべるなり。住吉の松の言の葉落ち散るべきにはあらねども、難波の蘆の末の世に、もし見る人はべらば、かたはらいいたき事なるべし。

童形の時、詠みて似合ひはべらぬ事どもあり。例へば、老いらくの昔語り、翁さびたる、侘びぬれば、木を樵り運ぶ、釣り垂れてうき世をわたる、市に重荷を運ぶなどいふたぐひ、このほか、本歌にあればとて、あらかねの土、あまざかる鄙、しながどり猪名野、かくのごとくの言葉、いかにも斟酌あるべし。惣じてわろしといふにはあらず。

稽古の時は、いかにも歌数を詠みて、細々に人に見せて、善し悪しをわきまへ知る事、肝要なり。会にあふ事は稀なれば、独吟を細々に沙汰あるべし。初心の時よりうつくしく詠みて、すき間無き様にとばかり心に掛くれば、歌の端張り無くして、一体にのみなりて、遂には小丈なる歌ならでは詠まれぬものなり。ことに独吟は、人前のしわざならねば、何たる事をもとりよせて、時に雅意に任せたる事をも詠みて御覧すべきなり。しかりといひて、歌の損ぬるやうにはあるべからず。歌の嵩を詠み出ださんといふ事なり。晴の歌の時、人の前にては、上に申せしごとく、児、若衆の身にも合ひはべらぬ事を詠むは、わるきなり。

このついでに、常に人の口にはあれども、その起こり何事とも知らぬ歌の古事、または聞き知らぬ詞、物の異名などの不審なる事どもの、一往の説を、片端申すべし。

難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春べと咲くやこの花

この歌と安積山の歌をば、歌の父母と申し習はしたれば、まづこの歌の心を知るべきなり。昔、仁徳天皇と申す御門おはしましけり。難波の宮に住み給ひし故に、難波の皇子と申し奉りき。御おととの宮は、宇治に住み給ひし故に、宇治の皇子と申しけり。父の御門のいかが思し召したりけん、御おととの宇治の皇子に御位を譲り給ふ。父の御門崩御の後、急ぎ御位につき給へと、難波の皇子のたまひければ、兄を擱きて位につくべき故無しとのたまへるを、難波の皇子重ねて仰せ事ありけるは、兄おととは入るまじきなり、父の御門御定めのおへは、とくとく位につき給へとて、互ひに辞退し給ふ。故に三歳まで御門も無くて、天下の民迷惑しける間、宇治の皇子、所詮我世にあればこそとて、むなしくならせ給ふ間、王仁といへる者、この歌を詠みて、君を祝ひ奉るなり。難波津に咲くやこの花冬ごもりとは、位につき給はで籠り給ひし事なり。今は春べと咲くやこの花とは、位につき給ふといへり。この花とは、兄の花といふ事なり。梅をば花の兄といふ故に、梅の花を指して詠めるなり。この君を仁徳天皇と申し奉るなり。

安積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは

この歌をば、歌の母と申し習はしたり。この歌の心は、昔、陸奥に、安積の里に住める女を召し上げ、采女とて召しつかはれし女の詠める歌なり。安積山影さへ見ゆるとは、陸奥にある名所なり。この山には浦、里、田ある所なり。されば安積山とも、安積の海とも、安積の沼ともいふなり。この沼といふは、入り海をいふ。影さへ見ゆるとは、いやしき者の住む家なれば、あらはなりといふなり。山の井の浅くといふは、文字の続け様なり。しかもこの海は、ただ浅き入り海なれども、果ては千尋の海なり。千尋のごとく思へども、涯分によるなりと詠める歌なり。女の詠みし歌なればとて、歌の母と申すなり。

H

この一首は回文の歌なり。回文錦字の詩の姿なるべし。昔、寶沼といへる者あり。その妻、蘇若蘭といへるあり。又妻に趙陽台といへるあり。寶沼、ある国の大守となりて下る時、陽台をば迎へとりて、若蘭をば残し置きけり。若蘭恨みての余り、せんかたなみに、二百余首の詩を作りて、錦にこれを織りあらはせり。上より下へ読み、下より上へ読め

ども、皆、声韻の詩となれり。寶治これを伝へ聞きて、あはれにや思ひけん、若蘭を迎へとり、陽台をば出だしけり。この故に、彼が織りたる錦をば、相思の錦と名付けけり。それ、我が朝にして、大和言葉にあらはす事、この一首より外は稀なる事に申し伝へはべる間、めづらしきに付きて、これを記しはべるなり。

歌を詠まんと思はん人は、大和もろこしのあはれる例、仏法世俗の道までも心に掛け、常は世のはかなき事を観じて、後の世のまことの道を願ひ、あるいは恋の道にこそ深きあはれは多かるめれど、うれしき節にも恨みあるが、ことにもこの道にのみ心を掛けましまさば、いかでか見る人もなびかざらん。

問一 問題文甲の傍線部AおよびGは、それぞれ和歌の修辭技巧について言及していると考えられる。その技巧の名称として最も適當なものを、それぞれ次のイ～ホの中から一つずつ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 縁語 □ 序詞 ハ 本歌取り ニ 枕詞 ホ 見立て

問二 問題文甲のB・E・Iの意味として最も適當なものを、それぞれ次のイ～二の中から一つずつ選び、マーク解答用紙に答えよ。

B イ 常に水準に達しない事は問題ではない。

□ 断じていけないと決めつけてはいない。

ハ すべて感心しないというわけではない。

二 一般に見劣りすると断じてはならない。

E イ やはり自分こそ帝位につきたかったと考え、空虚な気持ちになられた

□ つまり自身が生きているからいけないのだと、死んでおしまいになった

ハ 考えてみれば皇子に産まれたことが間違いだつたと、固く辭退をなさつた

二 結果的に私は出世を考えたことがありと反省し、失踪しておしまいになった

I イ 常に無常を觀念しひたすら仏道に帰依されたならば、

□ とくに人の道の誠を實踐するよう努力されたならば、

ハ 格別恋の道における男女の機微に通曉されたならば、

二 なかんずく和歌の道に集中をして精進されたならば、

問三 問題文甲の傍線部Cに見出される助動詞と同じ助動詞を含むものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ いかに思ふにかあらむ

□ 誰と知りてか恋ひらるる、

ハ 空よりも落ちぬべき心地す

二 御むすめ亡くなり給ひぬなり

ホ わが身はいまぞ消え果てぬめる

問四 問題文甲の傍線部D「晴の歌の時」と同じ意味を端的に表している漢字一字の語を、傍線部Dより前の範囲に見出し、解答欄(記述解答用紙)にそのまま記せ。

問五 問題文甲の傍線部F「奉る」は誰に敬意をはらっているのか。次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ ある童形 □ 父の御門 ハ 難波の皇子 ニ 宇治の皇子 ホ 読者

問六 問題文甲の空欄

H

に入るのに最も適当な和歌を、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ かぜ吹けば おきつしら波 たつた山 よはにや君が ひとり越ゆらむ
 口 唐衣 きつつなれにし つましあれば はるばる来ぬる 旅をしぞ思ふ
 ハ むら草に 草の名はもし そなはらば なぞしも花の 咲くに咲くらむ
 ニ ゆき降れば 木毎に花ぞ 咲きにける いづれを梅と わきて折らまし
 ホ 夜もすすし 寝覚めのかりは たまくらも ま袖も秋に へだてなき風

問七

問題文甲の記述によれば、この「釣舟」を執筆した時、著者はどのような境遇であつたと考えられるか。最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 歌道家の重鎮として、推しも推されもせぬ名声を博している。
 ロ もっぱら幼童に対する指導に奔走し、和歌の隆盛を支えている。
 ハ 出家者として仏に深く帰依し、難波の岸辺近くに庵を結んでいる。
 ニ 近年都を離れた生活を送っているが、和歌への情熱は保持している。
 ホ 精力的に全国を行脚し、和歌の遺跡や伝説を尋ねる日々を送っている。

問八

問題文甲の内容と合致するものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 初心者は、数を詠む努力を無心に積み重ねることで、精緻な歌が作れるようになるものである。
 ロ 難波津の歌は、王権をめぐる政治的内容が寓意されており、由緒を理解することが必要である。
 ハ 安積山の歌は、母親が詠んだだけに深い愛情がこめられており、万人を感動させる傑作である。
 ニ 若蘭が創始した回文の詩歌は、日本にも伝わり影響を与え、多くの模倣作品を生んだのである。
 ホ 歌道を志す者は、常に幅広い識見をもとめ、決して一つの態度に固執しないことが大切である。

乙

〔次に示すAは、問題文甲の二重傍線部「回文錦字の詩」に関わる「晋書」「列女」伝の「竇滔妻蘇氏」の記事である。またBは、その女が回文詩を錦に織ったことを踏まえた李白の「烏夜啼」の詩である。なお、問題に関連する箇所を送り仮名、返り点は省いてある。〕

A

竇滔妻蘇氏始平人也。名蕙字若蘭。善属文。滔苻堅時為秦州刺史被徙流沙。蘇氏思之織錦為回文詩以贈滔。宛轉循環以讀之。詞甚悽惋。

B

黄雲城辺烏欲棲。帰飛啞啞枝上啼。
 機中織錦秦川女。碧紗如隔窓語。
 停梭悵然憶遠人。独宿孤房淚如。

〔注〕「始平」…陝西省の地名。

「苻堅」…五胡十六国時代の前秦の皇帝。

「秦州」…甘肅省の地名。西安の西方。

「流沙」…甘肅省の砂漠地帯。

「秦川」…陝西・甘肅の秦嶺より北の平原地帯。ここでは「秦州」をいう。

「停梭」…機（はた）織りの手をとめること。

問九 問題文乙・Aの傍線部1「被徒流沙」を、全文ひらがな（歴史的仮名遣いによる）で書き下した文として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。なお、「徒」は、「うつす」と読む。

イ りうさにうつさる

ロ りうさにうつせしむ

ハ りうさもてうつせらる

ニ りうさよりうつしめらる

ホ りうさをかふむりうつさる

問十 問題文乙・Aの傍線部2「宛転循環以読之」は、どのような意味か。問題文甲の文中からその意味をあらわす最も適当な一文を抜き出し、その冒頭の五文字を解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問十一 問題文乙・Bの傍線部3「黄雲」のこの詩における意味の説明として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ「黄雲」は、「白雲」が行くあてもない旅人を暗示する語であるのに対して、明けそめぬ空の東雲しののめをいう。

ロ「黄雲」は、「青雲」が立身出世を象徴する語として用いられるのに対して、黄色にたなびく夕霞をいう。

ハ「黄雲」は、「紅雲」が紅蓮に染まった夕焼け雲をいう語であるのに対して、空に立ちこめた瑞雲をいう。

ニ「黄雲」は、「玄雲」が深く垂れこめた雷雲をいう語であるのに対して、一面が黄金色に輝く天空をいう。

ホ「黄雲」は、「紫雲」が仏の来迎を知らせる吉兆をいう語であるのに対して、秋の実りを言祝ことほぐ雲をいう。

問十二 問題文乙・Bの空欄 X : Y に入る語の組み合わせとして最も適切なものを、次のイ～ホの中から

一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ X…虹 Y…光

ロ X…舞 Y…金

ハ X…煙 Y…雨

ニ X…流 Y…沙

ホ X…錦 Y…氣

問十三 問題文乙・Bの傍線部4「憶遠人」は、どのようなことをいうか。その説明として最も適切なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 夫を遠ざけてきたわが身を省みること。

ロ 妻が遠征の任にある夫を思い出すこと。

ハ 遠く別れてすむ妻を夫が不憫ふびんがること。

ニ 妻が遠地にある夫の身を思いやること。

ホ 遠ざけてきた妻との離わかりが解けること。

(二) 次の文章は、一九五四年刊行の花田清輝『アヴァンギャルド芸術』に収録された「仮面の表情」の二節である（一部省略した箇所がある）。これを読んで、あとの問いに答えよ。

世には、さまざまな仮面がある。あなたの顔にじっくり合うようにつくられ、ほとんどあなたに、みずからの存在を意識させないような、たいへん、かぶり心地のいい仮面もあれば、すこぶる不細工なしろもので、それをつけているあいだ中、絶えずあなたの頬をこわばらせ、死ぬほどあなたをいらいらさせるような仮面もある。あなたの顔の表情の一つをとって、極度に誇張したり、歪曲ひずしたりした仮面もあれば、全然、あなたの顔とはかけはなれた、奇怪な表情をした仮面もある。神や悪魔の仮面もあれば、鳥やけものの仮面もある。

あなたは、つねに仮面をかぶる。したがって、あなたの恋人の愛しているのは、あなたの仮面かもしれないし、あな

たの敵の憎んでいるのもまた、やはりあなたの仮面かもしれない。どうしてあなたは、ひと前で、好んで仮面をつけるのであろう。いや、単にひと前ばかりではない。ともすれば、あなたは、ひとりぼっちでいるときでも、しばしば、仮面をはずすのを忘れてしまうのである。それは、あなたが、きびしく表情の限定された、はっきりした輪郭をもった仮面をかぶることによって、あなたの絶えず動揺する顔を——ささやかな刺激にもすぐ反応を示し、たちまち表情を変えてしまう、あなたの敏感な顔を、人眼にふれさせたくないと思っているためであらうか。それともあなたの顔の特徴を際立たせることによって、人眼をひこうと試みているためであらうか。あるいはまた、あなた自身の顔に飽きあきして、あなた以外のものの顔をもちたいと望んでいるためであらうか。いずれにせよわたしは、あなたのほんとうの顔を、みたことがない。

いつもなにかをせせら笑っているような、図々しい、不敵な顔の背後に、内気で、小さな、弱々しい顔の隠れていることもあれば、始終、生甲斐を感じているような、希望にみちた、快活な顔の内部に、幻滅に悩んでいる、いたましい、あわれな顔の潜んでいることもある。どちらが、ほんとうの顔で、どちらが仮面なのであろう。むろん、見馴れた顔が「イ」であり、その「ロ」の落ちた瞬間、あらわれてくる顔のほうが、「ハ」であるなら問題はないが、あるいはその新しい顔もまた、たいして変りばえのしない、新しい「二」であるかもしれないのだ。もう一つ仮面を！ 第二の仮面を！ ニイチエ風というならば、人間の顔は、一切仮面であり、わたしたちは着物をきたり、ぬいだりするように、次々に、「ホ」をつけたり、はずしたりして、生きつづけており、したがって、もしもわたしが、あなたの

「ヘ」をとらえようと考えるなら、嫌でもわたしは、あなたの仮面を手がかりにするほかはない。実証主義者が仮説を嫌悪するように、モラリストは仮面から眼をそむける。しかし、仮説が、科学的発見のための不可欠の前提であるように、仮面が、わたしに、あなたのほんとうの顔を発見させないとはかぎらない。思うに、あなたが、仮面を一刻も手ばなそうとしないのは、あなたもまた、わたしと同様、あなたのほんとうの顔を知らず、仮面を駆使することによって、あなた自身の顔のいかなるものであるかを、ひたすら探求しているためではあるまいか。ドン・ファンにしろ、タルチュフにしろ、みごと、仮面をかぶって、人眼をあざむいているつもりでいながら、実は、一步、一步、おのれのほんとうの顔をモサクしていたのではなからうか。要するに、仮面とは、ほんとうの顔からみちびき出されたものではなく、かえって、それをみちびき出すためのものではないのか。しかし、あなたの仮面から——いや、一般に日本人の仮面から、ほんとうの顔をみちびき出すのは困難である。たとえば、能面というものがある。

仮面が、ほんとうの顔への手がかりをあたえるのは、それが、いささかもほんとうの顔に似ていないばあいでも、丁度、分子が球突き球として、力が弾性のある管として表現されるように、きわめて単純化された、はっきりした表情をもっており、それをたよりに、ほんとうの顔をあきらかにすることができからであった。しかるに、能面には表情がない。そういう明瞭な表情は、きれいに拭い去られている。

「A」、完全犯罪の行われた現場のように、まるで手がかりというものが無いのである。いかにわたしが、ゆたかな推理力をめぐまれているにせよ、このような仮面から、わたしやあなたの顔を——わたしは日本人のほんとうの顔を探り出すことは、まったく不可能にちがいない。むろん、

仮面をとりあげた以上、わたしたちの祖先にも、おのれのほんとうの顔をみきわめたいという意志が、すこしもなかったとはいえないが、「B」、それならばどうしてかれらは、折りこみ、能面などという不埒な仮面を、苦勞して発明したのであろう。そこには、まるでおのれのほんとうの顔を、いつまでもみきわめたくはないという反対の意志が、同時に、はげしく働いているかのようである。もつとも、こういうと、いまだにわたしたちの周囲にたくさんいる

能面の愛好者たちは、能面の無表情は、ただの無表情ではなく、それは、すべての表情を殺すことによって、すべての表情を生かす、「C」の極致にほかならず、たいていの仮面の表情が外にむかって強調されているのに反し、能面においては、あらゆる表情が、内にむかっておしつづまれている。 「D」、それは、おのれのほんとうの顔を、内がわからとらえようとする、たくましい意志によって支えられているのだ、と、能面とは似ても似つかぬ不機嫌な表情をしながら、わたしにむかって抗議するかもしれない。しかし、はたしてわたしたちのほんとうの顔は、みずからの内部のぞきこむことによってあきらかになるであらうか。むしろ、それは、わたしたちが、おのれ以外のものに変貌しようと努め、おのれ以外のものでありながら、しかもおのれ自身でありつづけることによって——つまるところ、確固とした表情をもつ仮面をかぶることによって、かえって、はつきりするのではなからうか。思いきって大袈裟な表情をした

仮面なら、なんでもいい。わたしは、あなたが、たとえ滑稽にみえようと、グロテスクにみえようと、曖昧な表情をした能面などでない、固定した顔つきの仮面をかぶりつづけられることに、まったく賛成である。

能面は、正直なところ、わたしに、外界との接触を失い、自分だけの世界に閉じこもって、とりとめのない空想にふ

けっている、無表情な顔を思わせる。能面をつけた人物が、しばしば、舞台の上で、面白う狂い候え！ と要求される

ところを見ると、これは、まんざら、わたしの独断とばかりはいえないらしい。したがって、能面の背後に、するどい探求精神の隠れているはずもなく、無表情なドアの背後にみいだされるものは、塵埃^{じんあい}と蜘蛛の巣、荒れはてた部屋のなかのつめたい沈黙だけかもしれない。さきにもふれたように、おそらくは意志のアンビヴァレンツのため——おのれのほんとうの顔をみきわめようという意志と、みきわめたくないという意志とが、同時に存在したため、仮面の背後に、このような荒唐がもたらされたのであろうが——しかし、事のおこりは、むろん、人びとが、あやしげな仮面に、ふと心をはかれたためにほかならなかった。思えば、こういう仮面の犠牲者は、わたしたちの身边には意外に多く、たとえば、戦後の実存主義者のなかなどにも、無数に発見されるにちがいないが、そのあまりに空想的な点において、殊更に西洋的なものに対立し、もっぱら日本的なもののなかに閉じこもろうとした点において、そうして、わたしたちのほんとうの顔を、どこまでも内がわからとらえようとして失敗した点において、最も典型的な症状を示したのは、戦争中の日本主義者であった。わたしは、特別に、かれらの知性が貧困をきわめていたとは考えない。要するに、かれらは、仮面の選択をあやまったのだ。どうしてかれらは、しらじらしい顔つきをした能面などに魅力を感じたのであろう。この世には、呪われた宝石というものが存在するように、呪われた仮面⁶というものもまた、存在する。そうして、この不吉な仮面をかぶるや否や、突然、人びとは、ふたたび収拾のつかぬほど、かれらの精神を、ずたずたに引き裂かれてしまうのである。

(注)「ドン・ファン」：スペインの伝説上の人物。放蕩無頼の好色漢。

「タルチュフ」：フランスの作家、モリエールの喜劇に登場するべてん師。

問十四 傍線部1の漢字の読みをひらがなで、また傍線部2のカタカナを漢字で、それぞれ解答欄(記述解答用紙)に記せ。

問十五 空欄 イ へ には「仮面」あるいは「ほんとうの顔」のいずれかの語句が入る。空欄 へ と同

じ語句が入るものを空欄 イ ホ の中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

問十六 傍線部3「仮面とは、ほんとうの顔からみちびき出されたものではなく、かえって、それをみちびき出すためのもの」とあるが、そのための方法を端的に語った箇所がある。傍線部3より後の部分からその箇所を十五字以上二十字以内で抜き出し、解答欄(記述解答用紙)に記せ。

問十七 空欄 A B D に入る最も適当な語句を、次のイ・ホの中からそれぞれ選び、マーク解答

用紙に答えよ。ただしそれぞれの欄に同じ語句は入らない。

イ あるいは ☐ □ いわば ☐ ハ しかし ☐ ニ したがって ☐ ホ ともすれば ☐

問十八 傍線部4「わたしたち日本人のほんとうの顔を探り出すことは、まったく不可能にちがいない」とあるが、その理由として最も適当なものを、次のイ・ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 日本人は外界に向かって自己を強く押し出してゆく意志が弱いので、そうした行動パターンからは、ほんとうの顔を探ることが不可能だから。

□ 日本人はもともと外と内との区別をもたず、つねに変わらない態度をもって生きているので、仮面とほんとうの顔を区別することができないから。

ハ 日本人は一般に感情を表にあらわすことを嫌い、自分の好みにあった仮面をかぶり続けるので、そこからほんとうの顔を探ることは無理だから。

ニ 日本人は能面のようにはっきりした表情を示さず、すべてを曖昧にしておきたい傾向が強いのので、何がほんとうの顔であるかを探ることが難しいから。

ホ 日本人はいつも能面のように曖昧な表情をしており、ほんとうの顔など持ち合わせていないので、ないものをいくら探しても見つけることはできないから。

問十九 空欄

C

に入る最も適当な語を、次のイ〜ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 欺瞞

ロ 象徴

ハ 絶対

ニ 抽象

ホ 無限

問二十 傍線部5「アンビヴァレンツ」の意味として最も適当なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 危機的な矛盾をはらむこと。

ロ 是非の立場をとること。

ハ 正反対の意見を折衷すること。

ニ とんでもない極論を述べること。

ホ 相反する二つの感情をもつこと。

問二十一 傍線部6「呪われた仮面」という表現の内容として最も適当なものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 西洋的なものを極端に無視するあまり、日本古来の精神的なものを絶対化し、武力によって世界を征服しようとした軍国主義。

ロ 外界との接触をなくして、自己の世界に閉じこもり、荒廃した内面にとりためもない誇大妄想をかかえるにいたった国粹主義。

ハ 妖艶な仮面の魅力に取りつかれて、その背後にどんな邪悪なものが隠されているかも見きわめずに、自己を見失った神秘主義。

ニ 自己のほんとうの顔を見きわめたい意志と、見きわめたくない意志との間で揺れうごき、自らは何も決められない日和見主義。

ホ 何事も先天的に決定づけられており、相対的な価値ではない自己の意志によって行動しても、世界は動かないとする宿命論。

問二十二 本文において筆者が一番強く主張しようとしているのはどのようなことか。最も適当と思われるものを、次のイ〜ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 私たちは仮面をかぶらざるを得ないが、その仮面はほんとうの顔を隠すためのものではなく、どんなに極端に見えとしても、それは自分と外界とをつなぐものであることを忘れてはいけない。

ロ 仮面にもさまざまなものがあり、その用法やかぶり方によって意味するところも大きく変化するので、私たちは時と場所とをしっかりと見きわめて、たえず仮面を選び直すことが大切である。

ハ 私たちは仮面なしに生活し得ず、いつどんなときにも仮面をかぶり続けているが、不用意に他者へほんとうの顔を見せでもしたら、自己のアイデンティティの崩壊を招きかねないので用心しなければならない。

ニ 人間である限り自己とは別の顔を持ちたがるもので、いろいろな仮面をかぶることになるが、そのかぶった仮面に引きずられて、自分の意志とはかけ離れた馬鹿げた行動をとらないように気をつけなければならない。

ホ 能面は日本の文化に深く根つき、古来日本人の愛し続けてきたものだが、その無表情な面に見入ると、そこに自己の理想の表情を読みとりかねないので、そうした仮面ははずすべきである。

(三)

次の文章は、携帯電話（ケータイ）と現代の人間関係について考察した船木亨「パロール・エクリチユー・メール」（二〇〇五年）の一節である（一部省略した箇所がある）。「パロール」は話しことば、「エクリチユー」は書きことばを意味している。これを読んで、あとの問いに答えよ。

ケータイに対する評価は分かれている。現代文明の岐路？ あるいは社会に蔓延しつつある病理現象なのか。しかし、そのどちらに 1 を上げるべきかは問題ではない。何しろケータイとは、多くの人が使えば使うほど便利になるというタイプの機械であり、それを使えないと仕事にならない、仲間はずれにされる、そんな時代である。

わたしには、²ケータイは、ちょうど西欧近代文明の曙^{あけぼの}において時計が果たした役割を担っているように見える。だれもが自然の変化にあわせて生活していた中世の時代、修道院では自然の変化とは無関係に、規則的に礼拝を勤めるために一日を二四時間に等分し、人びとがそれを基準にして行動を調整する必要から、時計が発明された。今日、多くの人がびとが腕時計をもっているが、それをもつて、「時間を正確に知って、それによって行動できる理性的な人間だから時計を身につけている」ということもできようが、統一された時刻にそれぞれがみずからの行動を調整するようにプログラムされた人間たちが、腕時計の指令に従ってふるまっているだけ、といえなくもない。そうした定時法的時間体制こそ、近代の認識論の基礎にあるとともに、政治経済的な意味での近代人のありかたを規定していたのである。

他方、現代といえば、電気も通じていないアフリカの土地で、遊牧民（ノマド）たちが家畜を売買するためにケータイをもっている時代である。ケータイは、ポストモダン（脱近代）の時代において、時計と似て、時計を超えるほどの意義を担っている。それは、待ちあわせのような場面で、人びとを時計から解放し、時間と空間に対する自由なスケジュール変更を可能にしてくれる点では、より 3 な行動を可能にするといえよう。とはいえ、ケータイが前提する

ネットワークは、設置されつつある無数の監視カメラや、今後あらゆるものに添付されることになるであろうICTタグ（その物品の情報を無線で知らせる微小な機器）とあいまつて、（人間がケータイをもっているというよりは）ケータイにぶらさがっている人間のリアルタイムの位置情報、さらにはふるまいとコミュニケーションをまで追跡可能な体制を生みだしつつある。ケータイは、その位置をたえず基地局に知らせる仕組になっており、人びとはケータイを持ち歩くことによって、これまで推測によってしか自分の位置が特定できなかった地理空間から、コンビニに寄ったり電車に乗ったりしているさなかにも、つねにあるチャートへと——何を買ったか、どこに行つたかと連絡したかなど——付加価値（差異）をもつて位置を記されてしまう情報空間のなかに、知らず足を踏み入れるのである。

ところで、ネット上でさまざまな倫理的問題が生じているのは周知のことである。そこにはネットワーク固有の問題と、ネットワークを使っても使わなくても生じうる問題とがある。ネットワーク固有の問題の方は、ネットワークの非本来的な、つまり想定されていなかった使用から生じる思いもよらぬトラブルのことである。ここで注目すべきなのは、「フリーミング」である。フリーミングとは「燃えあがるような」という意味であるが、ネット上のコミュニケーションの特性として、のつびきならない状況にまで感情をこじらせ、犯罪に近い行為を暴発させるような事態のことである。こうしたことを行政や管理者が抑圧するにしても、あるいは逆に個人の表現の問題だからと放置してだれもが対抗手段を取れない事態になるとしても、それによってネットワークがきわめて使いにくいものになることに変わりはない。この問題にどう対処すべきかについてはよく論じられているが、それ以前に、これはどのような問題なのであるのか。

ネット上のコミュニケーションにおいて一旦フリーミングがはじまると、ユーザ相互においてたんなることばのやりとりから誤解が誤解を生じ、場合によっては誹謗中傷^{ひぼうちゅうきやう}にいたるというように、相互に感情を傷つけあつていく。どんなコミュニケーションでも人はときに感情的になる。だが、むしろケータイならびにネット上には独特のコミュニケーション形態があつて、そこにとりわけ感情的になりやすい特殊な要因があるというべきではないだろうか。その要因の一つとしてネットにおける匿名性、相手が見えず、いわば「顔がない」ということがあげられてきた。だが、電話や投稿といった従来のメディアにおいても、そのようなコミュニケーションがあつたのだから、それは決定的な要因とはいえない。フリーミングは、従来のコミュニケーションの構成要素のうちの何かが欠けているコミュニケーションではなく、ネットワークによって高度化されたコミュニケーション形態に伴う現象かもしれないと考えてみてはどうだろうか。

ある人びとは、ネットには、従来とはまったく別の自由な空間が開かれて、人類のコミュニケーションそのものの意義が変わつたと主張している。確かに、メールは高速簡便でグローバルな通信手段でありながら、電話のようにそのつ

ど相手をわずらわせることなく、多様な目的に対応する柔軟さと確実さをもっている。そうしたポジティブな機能に伴って、フレーミングのようなネガティブな問題がもたらされるのかもしれないであろう。

フレーミングは、法の整備によって対処するだけではすまないと考えられてきた。法には人びとの行為に介入すべき適正な水準というものがあ、その水準以下では、モラルに頼るほかはない。話しことば（パロール）には話しことばの「正しい言葉づかい」、書きことば（エクリチュール）には書きことばの「正しい文章」があり、電話でのある種の決まり文句や、手紙の礼儀正しい書き方のようなものがある。それゆえ、ネットでも（法以前のマナーとして）メールの正しい打ち方が守られるべきだとして、「ネチケット」なるものを唱導している人びとがいる。

だが、「正しいメール」というものがありうるものであろうか。どんな基準でその正しさを決めればよいのか。パロールやエクリチュールにおける正しさは、それぞれ理性に基づくと考えることができようが、フレーミングは、メール固有の秩序への違反としてではなく、以下に示すようにパロールとエクリチュールという、従来の言語のモードの「4」に由来しており、理性に訴えてすませるわけにもいかないのではない。

たとえば、メールを使いこなした人は、メールをパロールと解して軽口や冗談のパロールを打ちこむ傾向があるが、それを手紙等と同様のエクリチュールとして受け取る人は、そこに非難や侮蔑を見いだす。通常のパロールのなかでは、表情や動作、音調や笑い声が同時に与えられる。パロールにおいては非難や侮蔑のことばが親愛の情を示すこともあるが、メールではそれが難しい。記号を組みあわせて感情を表現する「文字絵」があつて、パロールに伴うべき表情をメールにも与えるために使われることもあるが、それもまた一つのエクリチュールとして受け取られるとなると、単なるジャルゴン（仲間内の用語）として、それを使うか使わなかが仲間であるかどうかの識別になるといったような次第で、かえって排他性を示すことにもなりかねない。

逆に、メールを手紙等と同様のエクリチュールとして打ちこんだとしても、読み手がパロールとして受け取ることがある。パロールとして受け取るということは、あたかも会話をしているかのように、相手の声を勝手に想像しながら、適当な音調や勢いにおいて読むということの意味している。それが正確に相手の音調や勢いを再現するのならいいのだが、そうした保証はない。いずれにせよ文字なのであるから、どうしても同一のテンポでしか読めず、とすれば、表現された起承転結や条件の列挙が無視され、その結果、読み手は、非難や要求のニュアンスがあれば、それを激しい断固とした口調として読むことになりがちである。いかに熟慮されたいい回しが使われていようと、自分の関心を惹いた部分だけを読む。ある人が質問や反論を冗長に繰り返したり、誤解を延長して極端な反応をしたりするのは、こうしたわけである。

以上のように、メールでは、一方にとつてパロールであるものが他方にとつてはエクリチュールであつたりというように、その現われかたが曖昧である。フレーミングは理性によって適正化することのできるようなものではなく、むしろパロールの正しさとエクリチュールの正しさの葛藤によって生じる理性の暴走——それゆえ理性が無効化されてしまふのではないだろうか。

問二十三 問題文二行目の「1」を上げる」は、競争や論争で一方を勝者・優者として判定することをいう。空欄

1 に入る最も適当な語を漢字二字で解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二十四 傍線部2に「ケータイは、ちょうど西欧近代文明の曙において時計が果たした役割を担っている」とあるが、

人間が時計とケータイに依存している様子を、同一の視点から端的にあらわしている箇所を、それぞれ二十字以内で文中から抜き出し、解答欄（記述解答用紙）に記せ。

問二十五 空欄 3 に入る語句として最も適当なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 規則的 □ 理性的 ハ 定時法的 ニ 政治経済的 ホ 感情的

問二十六 空欄 4 に入る語として最も適当なものを、次のイ、ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

イ 拡張 □ 逆転 ハ 混同 ニ 相殺 ホ 相似

問二十七 二重傍線部「たとえば、」（最後から三番目の段落）以降の箇所、次の一文が脱落している。入るべき箇所の直後の文はどれか。冒頭の五字を解答欄（記述解答用紙）に記せ。ただし、読点があれば字数に含むこと。

電話ですら声の調子を受け取ることができる。

問二十八 空欄

5

に入る語句として最も適当なものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ それゆえにパロールとして前に戻ったり繰り返して読んだりする
- ロ それゆえにエクリチュールとして前に戻ったり繰り返して読んだりする
- ハ それなのにエクリチュールとして前に戻ったり繰り返して読んだりすることはない
- ニ それゆえにパロールとして前に戻ったりエクリチュールとして繰り返して読んだりする
- ホ それなのにエクリチュールとして前に戻ってもパロールとして繰り返して読んだりすることはしない

問二十九 問題文の趣旨と合致するものを、次のイ～ホの中から一つ選び、マーク解答用紙に答えよ。

- イ 西洋近代文明の曙において時計が果たしたもつとも大きな役割は、時間を携帯できるようにしたことであり、さらに空間をも携帯できるようにした今日のケータイの役割と強い連続性をもっている。
 - ロ 人びとはケータイを持ち歩くことによって、現実的な地理空間とは別の情報空間のなかに足を踏み入れ、自らの位置情報や足跡が常に記録されることを新しい日常性の回復として積極的に受け入れようとしている。
 - ハ ネット上でさまざまな倫理的問題が生じていることを、決してネガティブにのみ理解する必要はなく、より多様で柔軟なコミュニケーションの一環としてポジティブに捉える視点もあり得る。
 - ニ ネットワークによってコミュニケーション形態は高度に匿名化されたが、こうした匿名性自体は従来のコミュニケーションにおいても存在しており、「フレーミング」の要因としてあげるには十分ではない。
 - ホ ネット上で生じているさまざまな倫理問題の大半は、現実生活でも起こり得るコミュニケーションのトラブルによるものであり、話し合えば和解決することができるという意味でネットに固有の問題とはいえない。
- へ「フレーミング」と呼ばれる現象は、ネットワークにおいてまだパロールやエクリチュールそれぞれの正しいマナーが確立されていないことによる、過渡的な現象と捉えることができる。

問三十 傍線部6に「メールでは、一方にとってパロールであるものが他方にとってはエクリチュールであったりというように、その現われかたが曖昧である」とあるが、具体的にメールではパロールとエクリチュールの関係がどのようなになっているか。筆者の考えに即して五十字以上七十字以内で解答欄（記述解答用紙）に記せ。その際、次の条件にしたがうこと。

- ・「メールでは、パロールなら……、エクリチュールなら……。」という形式の一文でまとめること。
- ・句読点や符号なども字数に数えること。
- ・行頭の一マス目をあけないこと。

〔以下 余白〕